

詩編 第31編 15節

「私の時は、御手の中にあります。私を敵の手から、また追い迫る者の手から、救い出してください。」

紅葉が盛んになり、野山に鮮やかな色調の絨毯を広げている。場所によっては枯れ葉が舞い、地上にカサカサと音を響かせながら重なっている。木立から、路上から晩秋を演じる。自然の時も御手により動かされ、それを愛でる人びとで束の間の山里の秋は一層盛り上がり、一瞬の光を放っている。

それにしても、この時期召される人びとの報を聞く機会が多い。遠く近くから届く訃報にこころ痛む。残されたご家族、残った友、時代の同伴者たちには寂しさが襲う。あまりにも突然のことでオロオロするばかりだ、と言う。救急搬送されたものの、その後少し安定したとの連絡で安堵した矢先の急逝に啞然とするばかりだ、と言う。思っていることと、やっていることがちぐはぐだ、と言う。取り乱している。長年連れ添ってきた者を喪失したときの当然な姿である。

痛み、寂しさがつのも、うろたえ、言動がまともでない時、それでもなお知っている者は言う。「私の時は、御手の中にあります。」脆く、弱く、頼りがいの無い自分がここにいます。しかし、私は知っています。頼るべきお方を、その御手があることを。

2022年10月31日